

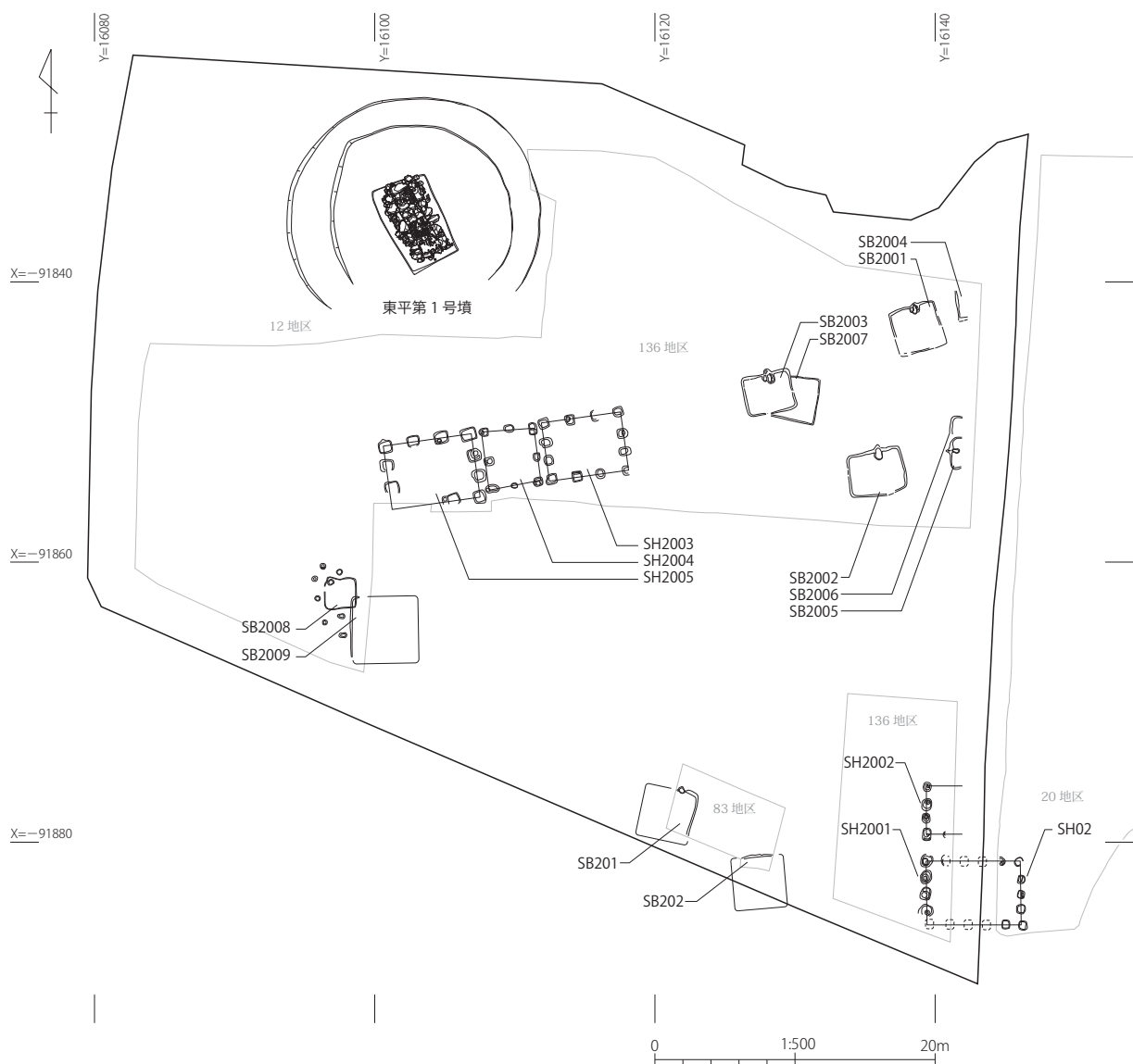
## 第4章 総括

### 調査成果

**掘立柱建物** 東平遺跡第136地区の調査では掘立柱建物5棟（SH2001～SH2005）、竪穴建物9軒（SB2001～SB2009）を検出した。掘立柱建物の使用時期の決定はある程度の年代幅でしか示すことができないが、8世紀代と考えられるSH2001・SH2002が敷地南側で認められる。建物軸がほぼ東西南北軸に合わせていることや、西側の梁間を揃えていることから計画的に建築された2軒の建物と考えられる。特にSH2001については、東側に隣接する第20地区SH02と同一遺構の可能性が高く、仮

にそうであるのであれば、桁行5間梁行4間の建物面積30.64平米を測る、東平遺跡の中でも比較的大きな建物に位置づけられる。掘方形状は方形を志向するものの、やや不整形なものが目立つ。

また、敷地中央部分で桁間をあわせる掘立柱建物3棟（SH2003・SH2004・SH2005）も注目される。それぞれの建物は近接しすぎていることや掘り方の形状が全く異なることなどから、同時に存在したとは考えられず時間差が想定される。出土土器が明確ではないが、8世紀後葉（富士Ⅲ）のSH2005について、9世紀前葉（富士Ⅳ）にSH2003が建てら



第85図 東平遺跡第136地区 主要遺構分布図

第2表 掘立柱建物 一覧表

遺構名	桁行×梁行 規模 (m) 規模 [尺]	面積 (㎡)	柱痕サイズ (cm)	時期
SH2001 + 20 地区 SH02	5 間×4 間 6.72 × 4.56 [ 22.4 × 15.2 ]	30.64	32	8 世紀代
SH2002	(1 間) × (3 間) (-) × (3.44) [ (-) × (11.5) ]	—	26	8 世紀代
SH2003	3 間×3 間 5.74 × 4.22 [ 19 × 14 ]	23.70	17 ～ 23	9 世紀前葉 (富士Ⅳ)
SH2004	2 間×2 間 3.75 × 4.19 [ 12.5 × 14 ]	14.00	15 ～ 25	9 世紀中葉以降 (富士Ⅴ以降)
SH2005	3 間×3 間 6.34 × 4.57 [ 21 × 15 ]	29.00	22 ～ 32	8 世紀後葉 (富士Ⅲ)

れ、9 世紀中葉（富士Ⅴ）以降に SH2004 が建てられたと考えられる。ただし、本調査区内ではその時期（富士Ⅲ～Ⅴ）の竪穴建物の存在は明確ではなく、SH2005 などの大型掘立柱建物が竪穴建物の作られる富士Ⅰ（8 世紀前葉）まで遡らないのか、判然としない。今回は出土遺物から SH2005 を富士Ⅲ（8 世紀後葉）に作られたという前提のもと、本調査区の時代ごとの様相を整理していくこととしたい。

建物面積は SH2005 が 29.0 平米、SH2003 が 23.7 平米、SH2004 が 14.0 平米を測る。掘方形状は大型で明確な方形である SH2005 から時期ごとに小型で円形もしくは不整形なものに変化している様相が認められる。

これまで東平遺跡では、桁行 9 間梁行 3 間の庖付建物が 28 地区 SH01（建物面積 127.40 平米）で認められているほか、3 地区の郡家関連建物群で桁行 5 間梁行 3 間の SH39 や SH49 が確認されている。今回検出された SH2005 はそれらに次ぐ大きさを測る。3 地区の郡家関連建物群は総柱の倉庫を含む建物群と想定されるが、SH2005 を含む SH2003・SH2004 の建物群は 8 世紀後葉から 9 世紀中葉まで場所をほぼ変えることなく、桁間を合わせて計画的に建築された建物群であり、宿泊機能を有する館などの性格を想定することができよう。それらの建物群の周囲には、竪穴建物などの明確な遺構が存在しないことから、周辺と明確に区別されたエリアであると推定されよう。

**竪穴建物** 次に 9 軒確認された竪穴建物について、整理していくこととする。検出位置は調査区の東側で最も多く、調査区のさらに東側の第 20 地区で 8 世紀から 10 世紀にかけての展開する竪穴建物群と一連の建物群として捉えられよう。

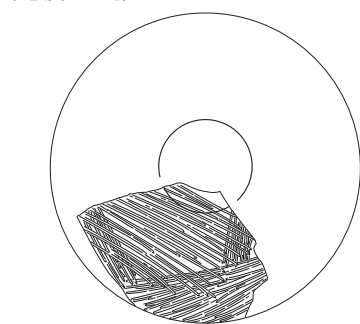
今回の地区では 8 世紀前葉（富士Ⅰ）の SB2002・SB2003、さらに遺物が少なく確証が持てないものの SB2007 などが最も古い時期の建物といえる。その後、8 世紀中葉（富士Ⅱ）から後葉（富士Ⅲ）にかけての竪穴建物は確認されず、9 世紀にはいと敷地東側の SB2001 がつくられ、隣接した 20 地区を含めた密接した居住実態を見ることができるようになる。また、9 世紀中葉から後葉にかけて敷地南西の SB2008 や SB2009 が造られるようになる。

#### 特徴的な遺物

**畿内産土師器** SB2003 からは畿内産土師器の蓋が出土している。つまみは欠損しているものの、ヘラミガキが外面のみに認められる点などから蓋と判断した。

まず、年代的位置づけを改めて明記しておきたい。奈良県明日香村石神遺跡第 5 次調査 B 期整地土に、未報告ながら蓋天井部分を 4 分割してヘラミガキする技法や形態的特徴が東平遺跡 SB2003 出土蓋と共通する資料が出土している<sup>(注1)</sup>。同資料群は飛鳥Ⅳに位置づけられており（森川・大澤 2018）、仮定暦

東平遺跡第136地区



SB2003 - 11



SB2002 - 19



SB2002 - 20

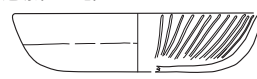


SB2006 - 4

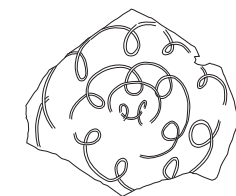


SB2005 - 3

東平遺跡第83地区

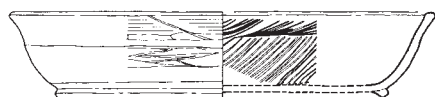


SB201 - 3

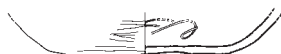


SB201 - 4

三新田遺跡A地区

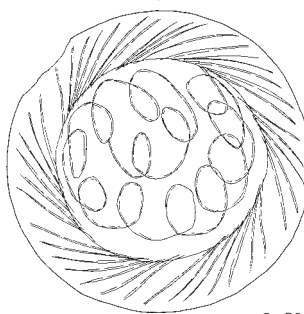
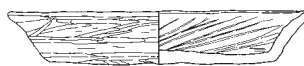


A - P27

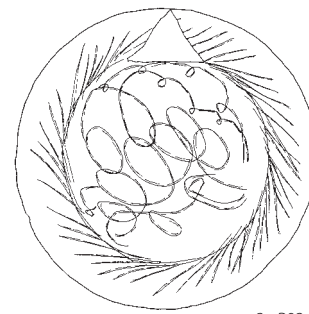


AT - P05

花川戸第3号墳



3 - P01



3 - P02

0 1:4 10cm

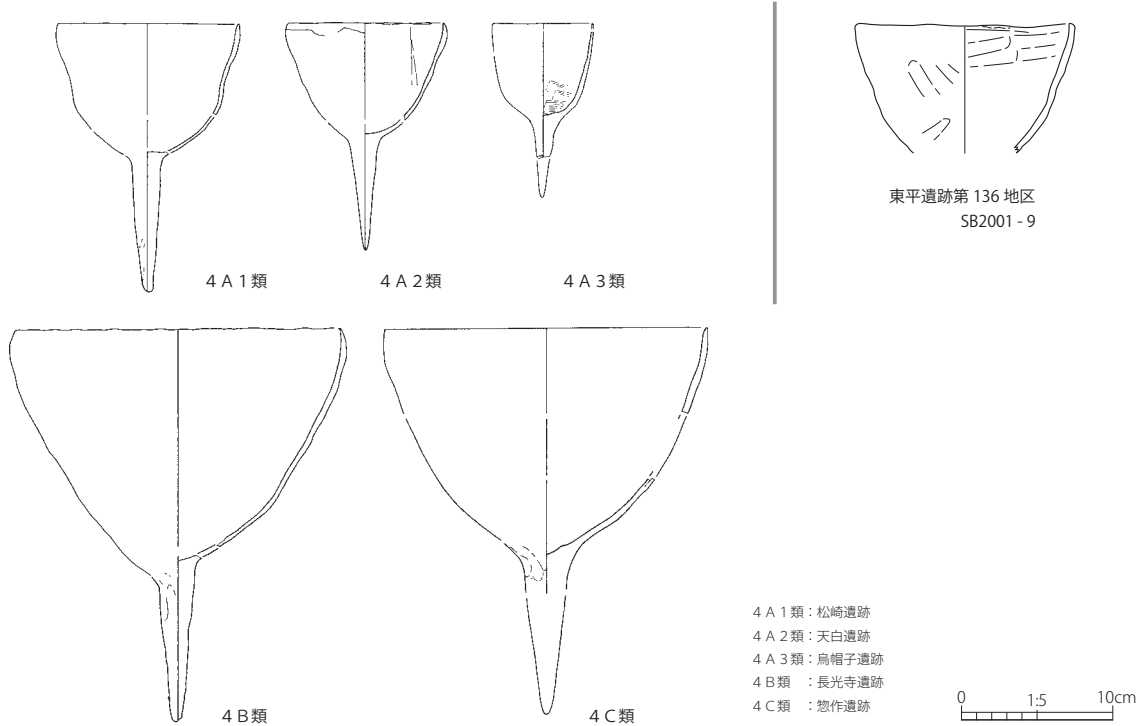
第86図 富士市内出土 畿内産（系）土器

年代として 675 ～ 690 年頃が想定されている（尾野 2019）。ただし、飛鳥Ⅱ・飛鳥Ⅲ・飛鳥Ⅳ段階の時間的推移は、古代宮都中枢部では認識できるものの、遺跡の性格や階層性により、「前段階の土器様相が残存してい」ることも指摘されている（小田 2020）ため、駿河国富士郡衙から出土したこの土器についても、必ず7世紀に遡るのとは言い切れない。今後、共伴する須恵器などの再検討を通じて「富士Ⅰ」の年代がどこまで遡るのか、年代幅をどう考えるのか、再検討していく必要がある。

さて、SB2003 の蓋以外にも、本調査区からは畿内産（系）土師器が複数、認められる。SB2002-19、SB2002-20、SB2005-3、SB2006-4 が畿内産（系）

土師器として指摘できる上に、隣接する 83 地区の SB201 から 2 点の畿内産（系）土師器が出土している（富士市教委 2017）。

これまで富士市内における畿内産（系）土師器は、三新田遺跡 A 地区 2 点（富士市教委 1983）や花川戸第 3 号墳 2 点（富士市教委 2003）が確認されている。それぞれ平城Ⅰ・Ⅱの段階に位置づけられている。東平遺跡でこれまでに報告例がないのが、単なる見落としの可能性もあり、実態をどこまで反映しているのか心もとないが、大規模な調査を行った第 3 地区でも 1 点も報告されておらず、現状では、本調査区周辺にまとまりがあるという点は指摘しておきたい。



第 87 図 SB2001 出土の製塩土器と類型

**製塩土器** SB2001 から脚が失われたものの、直径 15cm 程度に復元される製塩土器が出土した。表面に二次的被熱が明確に観察され、器壁は薄く、砂粒の混入が多い。成形方法も他の土器とは大きく異なる。形態的特徴などから愛知県知多・渥美および島嶼部産の製塩土器と考えられ、知多式編年で言うと 4B 類もしくは 4C 類に該当する（森 2010）<sup>（注2）</sup>。SB2001 例は共伴する土師器の年代をそのまま当てはめると 9 世紀前葉のものと想定される。静岡県内における製塩土器を集成した鈴木敏則氏によれば、県内における製塩土器は西遠江を中心に分布し、県内 17 例が認められ、敷智郡衙（伊場遺跡）や引佐郡衙（井通遺跡）など「古代郡衙もしくはその関連遺跡において多」く出土していることが指摘されており（鈴木 2010）、富士郡衙である東平遺跡に愛知県知多半島もしくは、渥美半島周辺から堅塩を入れた土器が運ばれていると考えられる。

東駿河に出土例はこれまで知られていないが、神奈川県三浦市松輪横穴や浜諸磯遺跡での出土が知られている（田尾 2008）。なお、駿河国庵原郡衙に比定される小里前遺跡でも近年、製塩土器が出土しているが（静岡市教委 2015）、器壁が厚く、内面に布

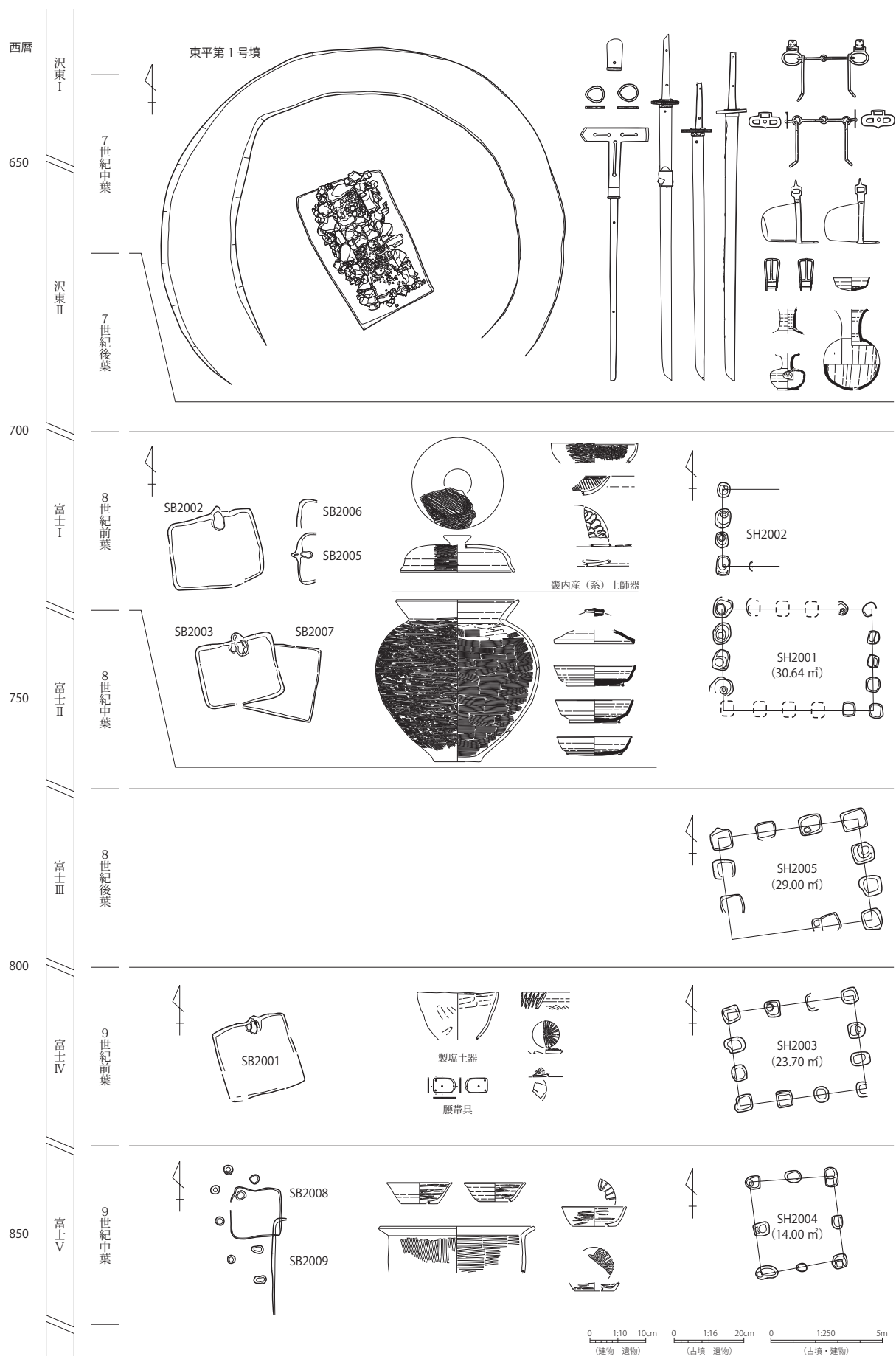
目の痕跡が残る特殊なもので（大林 2020）、東平遺跡や県内でこれまで出土しているものとは大きく異なり、その生産地も明らかではない。

森泰通氏によれば、奈良時代の東海地方における堅塩土器は、「上位クラスの階層が都風の食事を行う、もしくはそれが必要とされる場面で用いられていたと考え」ることができるという（森 2015）。SB2001 からは製塩土器に加えて、腰帯具が出土していることや、館の可能性が考えられる掘立柱建物群が隣接しており、本地区には、富士郡の外から来る人たちを迎い入れるような饗宴空間が整備されていた可能性が指摘されよう。

#### 東平遺跡第 136 地区の様相

前述の掘立柱建物群と堅穴建物の時期的様相をまとめて 136 地区の様相を改めて提示する。

7 世紀中葉には丁字型利器を含む豊富な副葬品が出土した東平第 1 号墳が第 136 地区の敷地内に造られたことが分かっている。石室内からは丁字形利器のほか、銀象嵌装大刀を含む大刀 3 振、鉄鏃や弓金具などの武具、轡や鐙などの馬具（金銅装のものを含む）が出土した。丁字形利器は、朝鮮半島の柄穴



第88図 東平遺跡第136地区 変遷図

鉄斧（斧鉞）の系譜をひく、軍事権を象徴する遺物であることが指摘されている（鈴木 2018）。古墳の被葬者の朝鮮半島とのつながりを示すとともに軍事的な活動を行った富士郡衙成立以前の地域首長と位置づけられている。

8 世紀に入り東平遺跡周辺が、駿河国富士郡衙として整備されていく中で、居住域も整備される。136 地区では SB2002 や SB2003 などがそれにあたり、周辺の第 20 地区や第 83 地区でも 8 世紀前葉からの竪穴建物を多数確認することができる。この時期に 136 地区を含む周辺では畿内産土師器と考えられる資料が比較的まとまって搬入されており、8 世紀前葉の富士郡衙内において外来の物資が集まる地点であった可能性が指摘できる。

8 世紀後葉以降、9 世紀中葉まで SH2005、SH2003、SH2004 の順に比較的大型の掘立柱建物群が造られており、前述の通り、畿内産（系）土師器がまとまって出土するこのエリアが、宿泊機能を有する館が展開する空間として整備される。この時期の竪穴建物は東側の 20 地区などで確認されており、明らかな利用空間の区別が行われていたと判断される。加えて、9 世紀前葉の SB2001 からは腰帯具や製塩土器が出土しており、宿泊者を招いた饗宴空間として機能していたことも想像できる。

東平遺跡の中でも、このエリアに特別な空間が整備された要因として、7 世紀中葉に周辺よりも一段高い場所に造られた東平第 1 号墳の存在が考えられる。本地区が居住エリアとなる 8 世紀前葉から中葉には東平第 1 号墳の前面や周囲には遺構が確認されず、明らかに古墳の景観維持の意識が働いている。

一方で、8 世紀後葉以降に造られる SH2005 を含めた掘立柱建物群は東平第 1 号墳の開口正面にわざわざ建設されていると判断される。これは、東平第 1 号墳の被葬者の後継者である地域首長が富士郡の郡領氏族層となり、8 世紀後葉に郡司層の祖先墓を臨む場所を利用した饗宴空間としての土地利用に変化したと推測される。

東平第 1 号墳築造以降、古墳を含むこの地区一帯が富士郡家にとって特別な意識・規制が働いていた空間であったことは想像に難くない。

#### 注

- 1 奈良文化財研究所 森川 実氏・小田裕樹氏に御教示頂き、実見させていただいた。
- 2 製塩土器の位置づけについては、豊田市 森泰通氏に御教示頂いた。



## 参考文献

- 大林 元 2020「静岡市清水区小里前遺跡出土製塩土器の再検討」『静岡県考古学研究』51
- 小田裕樹 2020「飛鳥の土器と「日本書紀」」『國學院雑誌』第121巻11号
- 尾野善裕 2019「飛鳥時代宮都土器編年の再編に向けて」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所
- 静岡市教委 2015『小里前遺跡・庵原館跡』
- 鈴木一有 2018「丁字形利器とその系譜」『伝法 東平第1号墳』富士市教育委員会
- 鈴木敏則 2010「静岡県内出土の製塩土器」『東海土器製塩研究』考古学フォーラム
- 田尾誠敏 2008「東国湾岸地域における製塩関係遺構・遺物」『塩の考古学』山梨県考古学協会
- 立松 彰 2010「伊勢湾と三河湾の製塩土器」『東海土器製塩研究』考古学フォーラム
- 早野浩二 2017「知多・渥美・三河湾の土器製塩とその特質」『海の高墳を考えるIV』79～93頁 学術研究会「海の高墳を考える会IV」実行委員会・海の高墳を考える会
- 富士市教育委員会 1983『三新田遺跡発掘調査報告書』
- 富士市教育委員会 2003『花川戸第2・3号墳発掘調査報告書』
- 富士市教育委員会 2017『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成28年度—』
- 藤村 翔 2020「駿河国富士郡域における古代集落の構造と変遷」『古代集落の構造と変遷』（古代集落を考える1）第24回古代官衙・集落研究集会
- 森 泰通 1997「東海地方における消費地出土の製塩土器」『シンポジウム製塩土器の諸問題—古代における塩の生産と流通—』塩の会シンポジウム実行委員会
- 森 泰通 2010「東海地方における古代土器製塩覚書 2009」『東海土器製塩研究』考古学フォーラム
- 森 泰通 2015「古代東海における堅塩づくりの製塩土器」『塩の考古学II』山梨県考古学協会
- 森川 実・大澤正吾 2018「石神遺跡B期整地土・SD640出土の土器群 —石神遺跡第3～5次・第10～12次」『奈良文化財研究所紀要 2018』